経営論集　第27巻第1号　2017年　133～143頁

高校までの文章教育と大学での文章カリキュラムの考察

占　部　礼　二

1.　概要と先行研究

大学生活を送る学生にとって、「文章を書く」という行為は切っても切り離せない。大学一年生になると、レポート課題への対応、就職活動になると履歴書・エントリーシートの（以下、ESと略す）作成、最終年次になると卒業論文の取り組み。それに対して、学生たちが共通して言うことは「文章を書くのがとにかく苦手（全てのものに対して）」ということ。先行研究において「学生が文章教育に望むこと」において山崎哲永（01年）は「原稿用紙の遣い方や表記など、ごく基本的なことがらは教わっている一方で、文章の構成等については小・中学校の間に指導を受けた学生が少なく、一部の学生が小論文を学ぶ際に勉強した経験があるのみ」と述べている。学生生活を送るうえで文章力は非常に重要であるにも関わらず、それに適したトレーニングを受けてきた経験が少ない、あるいはずれている可能性を指摘している。さらに言うと、社会人となって働き出したあとにも書く事は仕事の中で重要性を求められるが、上手く対応できていない人が多い。千古・中條（07年）は「キャリア教育としての『書く』力の育成―『国語』教育との連携を目指して―」では小・中・高での国語教育での意義を定め、高校・大学で同一教材を使用することを提案している。毛利（10年）はキャリア教育とアカデミックライティングとの連動を論じている。両論文とも文章教育において、高大接続の重要性を説いたものだ。この論文では学生へのアンケート調査をもとに、高校までの文章教育をまずは振り返る。そして、大学・社会人生活の中で活かす効果的な文章教育の在り方を提案したい。

大学入学以降少なくとも３つのタームポイントがある。①大学入学以降、レポート・論文への対応　②就職活動において履歴書・ESへの対応　③社会人となったあと企画書・報告書などのビジネス文書への対応　この３つが考えられる。文章教育の中でどんな要素が求められるのか。それに合わせて、どんなカリキュラムを作るべきかを論じる。

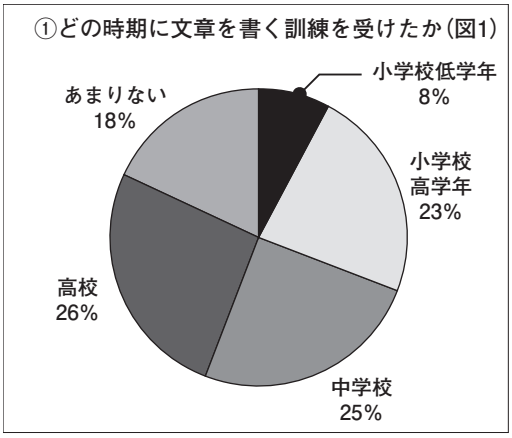
2.　研究の目的と方法

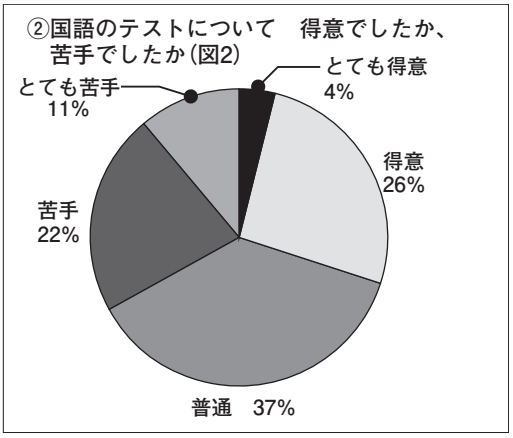
研究の目的は、初年次教育における文章教育のあり方・理想のカリキュラムを考察・提案すること。一般論として、「学生は文章を書くのは苦手」と言われているが、本当に大学入学まで

の学校教育で文章教育を受けていないのか。大学生は文章表現において、何が苦手で、何に難しさを感じているのか。それをアンケート調査の中で明確にしていく。大学1年生に「今までどんな文章教育を受けてきたのか」を、大学2年生に「大学で書くレポート・論文について難しい感じる点」を、大学3～4年生に「就職活動において履歴書やESは何が難しいのか」をアンケート調査する。この3種類のアンケート調査を用いて、分析する。そこから今後の文章教育において、何が必要なのかを提案していく。

3. 大学入学までの文章指導について（大学１年生を対象としたアンケート調査の結果と考察）

（両アンケートともに対象者493名）

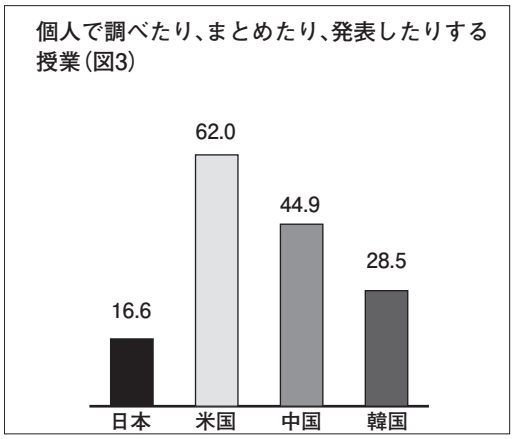


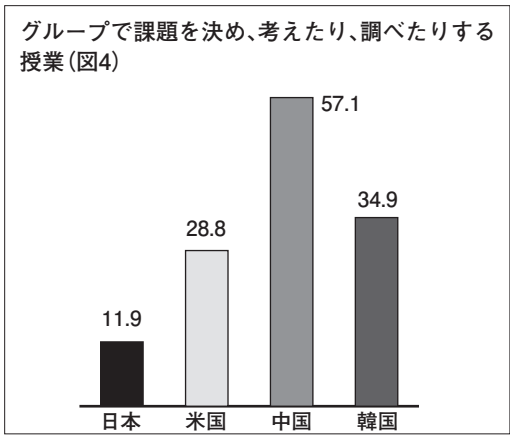


上記のアンケートは入学してまもない1年生を主にアンケートを調査した。まずは①のグラフについて。高校時代に文章指導を受けた学生が全体の26％しかおらず、ほとんどの学生が高校入学の前までにしか文章指導を受けていない。高校時代に文章のトレーニングを受けていないということは書く事になれておらず、大学生になってからのレポート課題などに戸惑うこともうなずける。さらには②のグラフについて。文章指導を受けていない学生が多いにも関わらず、国語のテストを苦手・とても苦手と答えた割合があわせて33％にとどまっている。これは国語のテストと書く力が連動していない可能性を示唆している。もし連動しているなら、文章教育を積極的に受けていないことで、国語のテストも苦手と答える割合が多いはず。日本の国語教育はアウトプットを重視した文章力育成よりも、インプットを中心とした読解力育成を重視していることが推測できる。だからこそ、大学の早い段階で文章指導をあらためて行う必要があるのではないか。

アンケートでは他に「得意と答えた人も苦手と答えた人も理由を教えてください」という記述式の解答欄も用意している。ここで、回答者の意見を個別に見てみたい。特徴的な意見として目についたのが、（得意者）「小説（あるいは本）を読むのが好きだから」、（苦手者）「筆者の気持

ちが読み取れない」という回答。テストに掲載されている例題文をいかに読み込みむのか、そこに主眼が置かれていると推測できる。もし国語のテストの良し悪しが書くことであると学生自身も認識しているのであれば、この回答内容に「書く」ことに関するキーワードが出てくるはずだ。国語のテストでの良い点・悪い点の分かれ目、あるいは得意・不得意と感じる分かれ目は読解力にあると推測できる。また興味深い回答に「文書の中に答えがあった」というものがある。国語のテストの形式としては、著名な作家が書いた例文などが必ず掲載されていて、それを中心に問題が出される。ようは、その例文の中に必ず答えが潜んでいるといえる。限られた範囲の中で答えを導き出そうとすることが国語のテストのプロセスなのである。それが大学生になると、文献・先行研究論文を読んだり、アンケート調査をしたりなどして、自ら調べ出すという作業が必要になる。高校までの国語のテストでは、調べるという作業を求められていないために、大学生になってレポート課題などで苦戦をしてしまうのではないか。文章を書く、という点では同じだが、範囲が決められている国語のテストと、範囲がある意味決まっていないレポート・論文の違いがあるからだ。





※両図とも「ほとんどそうだ」「半分以上はそうだ」と回答した者の割合

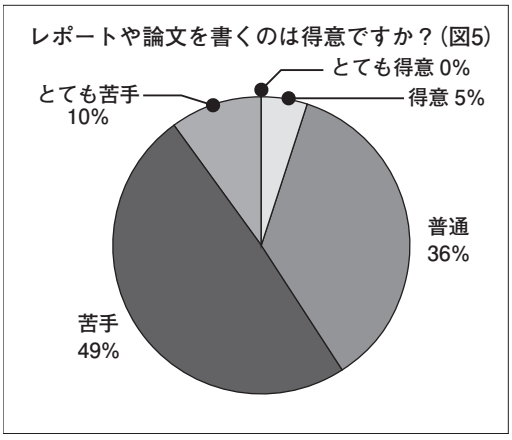
国立青少年教育振興機構が平成29年3月13日に「高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書～日本・米国・中国・韓国の比較～」を発表した（上記グラフ）。これは平成28年度に高校生（有効回答数、日本：2015人、米国1540人、中国：2499人、韓国1800人）を対象とした国際比較調査をまとめたものである。2項目目の「受け身的な授業が中心」という項目を見てみたい。「日本の高校生は、『教科書に従って、その内容を覚える授業』が多いと感じている反面、いろいろな教材や教具を活用する授業、生徒個人やグループで調べる授業などが少ないと感じている」という見解を導き出している。「あなたの学校では、どのよう授業が多いですか。」という設問にたいして「教科書に従って、その内容を覚える授業」という回答に対して41.7％の生徒が「ほとんどそうだ」、49.5％の生徒が「半分以上はそうだ」と答えている。米国の生徒はこの問い

に対して、11.0%が「ほとんどそうだ」、25.9%が「半分以上はそうだ」と答えた。この報告書では図①と②の設問もあるが、日本の高校生は他国に比べて圧倒的にポイントが低くなっている。もちろんこれは、国語系の授業に限った話ではなく、全科目についての意識調査になる。しかし、どの科目においても調べるという訓練が行われていないことは確かだ。

よく教育の世界では「学問」という言葉で大学生からの学び方の違いを説明する。高校までの学び方は、大学受験を重視したインプット・暗記型であることが多いと一般的に言われる。しかし、大学に入ってからは、自ら履修科目を選び、自らの価値観で学ぶことを決めていく。学問とは「問うを学ぶ」と書く。自ら課題を見つけ、テーマを立てて、調べて、学びを深めていく。大学のレポートや論文でも、もちろん大まかな領域や出題範囲は決まっているが、どう答えを出そうとするかはその人のアプローチの仕方によって当然変わってくる。高校までの学び方と大学からの学び方の違いが、「書けない」状況を生み出しているのではないか。

まとめると、①文章を書く習慣が根付いていないこと　②調べる力が必要　ということがわかった。

4.　大学2年生を対象としたアンケート調査の結果と報告



大学2年生の42名に「レポートや論文を書くのは得意ですか？」という問いを投げかけたところ、とても苦手・苦手と答えた人が合わせて59%にのぼった。得意と答えた人は5%しかおらず、とても得意と答えた人は一人もいなかった。その理由を記述式で回答をしてもらったところ、苦手と感じた人の答えには以下のものが目に付いた。

・同じことを何回も書いてしまったり、自分の伝えたいことが分からなくなってしまう
・文章の広げ方が分からない
・気がつけば何を書いているのか分からなくなる
・書きたい内容がうまく文章にできない。内容が広がらない

内容をまとめたり、広げたりすることに難しさを感じている学生が多いように見受けられた。そもそも大学生活では、レポートを書いたり、期末テストで記述式の文章を書いたりする作業をしてはいるが、一方的に書いて終わってしまっているケースが当然多い。自分の書いたものに対して細かいフィードバックを受けていないがため、書いたものをどう広げたらさらに良かっ

たか、どうまとめれば良かったか、上手く対応できていない。期末試験などで論述式のテストが出ても、書いた文章は手元に戻ることはなく、成績でのみ成果を知るしかない。自分の書いた文章が、細かくどこがだめで、どこが良かったかフィードバックを受けることができない。

では、次に「高校までに求められる文章と大学で求められる文章の違いは何だと思いますか？」という設問を作ったところ、以下の回答が特徴的だった。

・客観的に、具体的に、論拠しなければならない
・大学で求められる文章は述べるだけでなく自分の意見を論述するのが難しい
・高校ではある程度模擬回答があるが、大学は自分なりの考えである
・自分の考え方が大切だ
・高校までは感想文、大学では意見・見解
・大学で求められる文章は実際と自分の考えをつなげる

まずは回答にあったのが「客観的」と「具体的」という言葉だ。アンケートでこの言葉を書いた学生は多い。しかし、客観的と具体的な違いを理解しているかは疑問だ。そして、次にポイントとしてあげられるのは「意見」「考え」「感想」「事実」という言葉。アンケートの中で、この４つの言葉のどれかを使っている人が多かった。それぞれバラバラの認識を持っていることが伺えた。高校時代までの文章と大学時代の文章の違いをここに基準を置いて指導していく必要があるのではないか。そもそも大学のレポート・論文などで自分の意見を書いていいのか、と悩む学生がいる。それに関しては「論文は『あなたの意見』を書くものです。読み手は、もともと書き手の意見を読むことを期待して読むのですから、そのように考えた、誰が考えたという説明は不要です。」と「これからの研究を書くひとのためのガイドブック」で佐渡島・吉野（08年）で述べている。意見と言うと主観的で抽象的なイメージがあるが、その意見を裏付けるために事実を積み上げることで、説得力が生まれ客観的で具体的になっていく。また石井（11年）は「ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方」で意見とは「客観的に判断し、根拠をあげて説明する」。感想とは「心に浮かんだ思いや印象が中心になる。意見とは違い、好き嫌いなどの主張に重点があり、自分の体験や価値観をもとにどう感じたかを書く」「論証とは証拠となるデータをあげながら主張することです。」とある。根拠・論拠をあげる、そこから意見を作る、ということが学生たちはできているのか。そして、アンケートの3つ目のポイントとしては、「自分なりの見解」を持たなければならないということを共通認識としているような回答が多かった。ここに関して、さらに考察してみたい。「試験で出てくる論述式や記述式の問題は何が難しいですか？」という設問に対して以下の特徴的な回答をあげてみる。

・論拠不足で論証が十分できない
・グラフをみて、推測して、自分の流れを書いたりする

・データを見てその状況を分析する

論証をするということが、自分なりの見解・テストの回答につながると考えてはいるようだが、そのためにデータ・資料をもとに推測したり、答えを作ったりすることに難しさを感じていると読み取れる。調べること、そこから自分なりの何かを導き出す訓練が必要なのではないかと考えられる。

他にも数々の多様な意見があった。それは、学生たちに概念についての共通認識が無いこととも言えるのではないか。高校と大学で求められる文章力の違いについて、いろいろな意見があるということは、その点に関してはっきりとした定義を学生たちが持っていないのではないかと考えられる。文章指導において、この点に関して明確にする必要がある。

まとめると、文章を書く上で重要な概念（主観的、客観的、抽象的、具体的、意見、考え、論拠、根拠）を明確にする必要性がわかった。

5. 就職活動で感じる文章の難しさ

就職活動における履歴書の難しい点は「字数が少ない点」がまずはあげられる。千字単位のレポートに慣れている学生はまずこの点に戸惑う。大学によって履歴書のフォーマットはさまざまではあるが、だいたいどの大学も1つの設問に対して200 ～ 250文字程度しか書くスペースがない。学生時代の体験談をこの字数で、かつエピソードを盛り込んだ具体例を書く事は至難の業だ。そして、昨今学生たちが最も苦手にしているのは「志望動機」である。大学指定の履歴書・企業から出されるESで、ほとんどのケースで書かされる。志望動機と論文の作成プロセスは実は似通っている。論文作成のプロセスを大まかに言うと、テーマを決める→調べる→意見を作る→書く、という流れだ。志望動機も実は同じ。まずはテーマを決める（自分はどんな方向性に進んでいくのか、人生のテーマは何か）。そして、調べる（業界研究・企業研究を行う）。時に、説明会で聞いた話を分析し、時に企業から発信されている決算書などのデータを読み込み。そして、意見を作る（調べたデータをもとに、どんな魅力が業界・企業にあるのか、自分なりにまとめる）。そして、最後にそれを志望動機としてまとめる。学生時代にレポート・論文を作成した経験が多いほど、志望動機を上手く書ける傾向にあると学生の就職指導の際に感じる。学生時代に学業をしっかりと行っていなければ、テーマが決められない、調べられない、データをもとに意見を作れない、書けない、ということになってしまう。学業と職業は実は密接に関係している。

6.　カリキュラムの提案①「4ステップの400字作文」

文京学院大学の「キャリアデザインⅠ」という科目は2年生をターゲットとしている。翌年に就職活動を控え、基本的なコミュニケーション力を身に付けることが狙いだ。授業の中で、4回にわたり基本的な文章の書き方を教えている。4つのステップに分けて、毎回の授業の中で400字の作文を書き、クリアできているか確認する。学生同士で添削をし合い、他者の文章と自分の文章を見比べることで客観視していく。

・ステップ①　客観表現と主観表現

とかく学生は自分（あるいはごく身近な人）にだけ理解できる言葉を使ってしまう。年次が進むにつれて、身近なコミュニティーの枠を超えた人とのコミュニケーションが増える。そんなときに、他者に理解できると言葉をつかえなければ、信頼関係やチームワークの発生は望めない。このステップでは、客観表現とはどういうものかを紹介する。以下に紹介する客観表現を用いて400字の作文を書く。

・客観表現：数詞、固有名詞
・主観表現：形容詞、形容動詞、副詞、若者言葉、こそあど言葉、方言　など

【例文】

（×）　この間、久しぶりによくいくラーメン屋に行ったんだよね。そしたら、やっぱりすごく美味しくて、感動したな～。

（○）　３日前のことなんだけど、２年ぶりくらいに東京駅にある「○○軒」っていうラーメン屋に行ったんだよね。一時は５日連続で通ったこともあったな～。そしたら、美味しすぎて１杯３０秒くらいで平らげる勢いでさ…。食べ終わったあと３日は頭から離れなかったな～。

・ステップ②　一点突破とバラエティ

いろいろなことを伝えようとし過ぎてしまって、結果的に何が伝えたいのか分かり辛くなってしまう。考えながら書いてしまっている、というのも一因。どんなことを書くのか、どんなことを伝えたいのか、ワンテーマに絞り込んでから書く。

【例文】

（×）　この間見た映画、とっても面白かったよ！アクションシーンあり、笑いが巻き起こるシーンあり、涙が流れるシーンあり。ほんと盛りだくさん。登場人物の設定もうまく作りこまれていて、ラストの落ちも予想を覆されたよ～。

（○）　この間見た映画、とっても面白かったよ！特に印象に残っているのが、ラストシーン。最後はハッピーエンドで終わると思っていたんだけど、○○が出てきて、なんとバッドエンドだったんだよ。あの驚きが忘れられないな～。

・ステップ③　具体的と抽象的

抽象的な文章よりも具体的であるほうが好ましいことは誰もが知っている。では、どんな文章が具体的なのか、どんなエッセンスがあると具体的なのか。そこを明確にする。ポイントは、「説得力のある裏付けがあるかどうか」だと考える。その裏付けがどんなものなのかが判断を伴い学生には難しい。

・具体的：事実、実際に起きた出来事、調べたデータ・情報など
・抽象的：概念、思い、想像、頭の中の出来事

【例文】

（×）　大学生は文章を書くのが苦手だと言われている。そのために、文章力を伸ばす「日本語表現」という文章の訓練を積む授業が必要ではないか。就職活動でも大概の企業では履歴書などの書類選考もある…。

（○）　学生500名へのアンケート調査から、実に8割の学生が「文章を書くのが苦手」と答えた。だから、「日本語表現」という授業が必要ではないか。就職サイトの○○の調べによると、９８％企業で履歴書などの書類選考を導入している…。

・ステップ④　クライマックスとあらすじ

話の全体像をまんべんなく書いてしまって、強弱・濃淡の無い文章を書いてしまう。まるで本のあらすじのような表現。本来、文章には「特にここを強調したい」という個所が必ずある。そこにワンシーンに字数を割いて、丁寧に書ける情報を書く。

【例文】川端康成の「雪国」よりの一節

鏡の底には夕景色が流れていて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのように動くのだった。登場人物と背景とはなんのかかわりもないのだった。しかも人の世ならぬ象徴の世界を描いていた。殊（こと）に娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともいえぬ美しさに胸がふるえたほどだった。

遥かの山の空はまだ夕焼けの名残の色がほのかだったから、窓ガラス越しに見る風景は遠くの方までもののかたちが消えてはいなかった。しかし色はもう失われてしまっていて、どこまで行っても平凡な野山の姿が猶更平凡に見え、なにものも際立って注意を惹きようがないゆえ

に、反ってなにかぼうっと大きい感情の流れであった。無論それは娘の顔をそのなかに浮かべていたからである。窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔をそのなかに浮かべていたからである。窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。しかし本当に透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのように錯覚されて、見極める時がつかめないのだった。

これは主人公の島村が雪国に向かう電車の中でのワンシーンだ。ほんの数秒の出来事であろう場面を丁寧に描写している。細かく、丁寧な表現が印象的だ。しかし、とかく若者は「沈む夕日がきれいだった」と単純な言葉で書きまとめてしまうことが多い。書ける情報に細かく着目して、丁寧に表現することが大切だ。

7.　キャリア特講Ⅰでの文章指導に関して

文京学院大学の「キャリア特講Ⅰ」という科目は3年生をターゲットとしている。10 ～ 12月頃から始まる就職活動。学生たちが一番悩む職業選択。会社・業界を調べる作業が必要になるが、調べる・疑問を持つという能力が身についていない学生が多い。この科目では課題「街作文」を柱に文章の書き方に特化した講義をしている。街にある魅力を自分で見つけ出し、調べ、その魅力を文章としてまとめる。街作文にチャレンジすることで、調べる・疑問を持つ習慣が身についていく。街には魅力がたくさんある。しかし、街は見ているようで見ていない。「眺めている」に近いとも言える。身近にある街を改めて「見る（観察する）」。それを調べることで、身近にあるものに疑問を持ち、調べる楽しさを知ることができる。街にある、身近にあるものの魅力を調べて、それに気づけない人が、はるか遠くにある企業・業界（さらに言うと世の中・社会）のことを調べたり魅力を見つけたりできるはずがない。まずは身近なものから始めることが重要だと考える。この章では「街作文」の書き方を紹介したい。参考にしている文献は、グロービスでライティング指導をしているバーバラ・ミントの「考える技術・書く技術」だ。

著書の中で、文章を書くためには「Guide」、「Situation」、「Complication」、「Question」、「Answer」の5つの構成要素が必要だと説いている。その中でも重要なのが「Complication」だ。文章は複雑化を起こさなければいけない、複雑化を起こすから人は興味を持って最後まで読んでくれると説いている。例文を紹介する。

（例文）NHK「サラメシ」三重県熊野のサンマ漁（2015年2月放送）

秋の味覚と言えば「サンマ」。しかし、実は秋ではなく冬が旬のサンマがある。普通、サンマ漁は夏の終わりごろから北海道沖で行われるが、三重県熊野灘では冬にサンマの漁が行われる。太平洋を南下してきて、脂の落ちたサンマだから美味しい丸干しができる。サンマの丸干

しを作っている漁師の一家を取材しました…。

普通は秋の味覚であるサンマが、冬に旬を迎えるという切り口が複雑化を表している。複雑化に成功していることで、読み手が興味を持って最後まで読んでくれるのだ。　ではこれを「街作文」に置き換えてみると、以下の例文になる。複雑化を起こせていない例文と一緒に参考にする。

（例文①）

歴史を実感できる街が大阪にある。古墳の街・堺だ。古墳といえば、堀の外から眺めるもの。仁徳天皇陵は大きすぎて、近づいて見てみると、もはや森にしか見えない。しかし、走りまわれる古墳がある。堺市の上野芝にある文殊塚古墳。高さ１ｍほどの柵を越えれば簡単に入れる。子どものころは怖い物知らずで、よく塀を乗り越えて中を走り回ったな（笑）。もちろん本当は立ち入り禁止なので、入ってはいけません。

（例文②）

歴史を実感できる街が大阪にある。古墳の街・堺だ。日本でもっとも大きな古墳と言えば、仁徳天皇陵だ。現在、世界遺産に登録しようと、皆で努力している。古墳の周りはちょっとした散歩道になっていて、コースとして補整されている。風邪を感じられるいいところだ。一度、周りをのんびり歩いてみてはどうでしょうか。

例文の①は複雑化されており、②は複雑化がなされていない。ポイントは一般的な常識や認識を覆そうとする視点があるかどうかがカギになる。この複雑化という感覚は、会社や企業を調べたりするうえでとても重要になる。

学生は就職活動のなかで、企業研究・業界研究ということをしなければならない。それはつまり、調べるという作業になる。では何を調べるかというと、もちろん企業・業界の魅力を調べるのだ。しかし、「魅力」とは非常に曖昧なもので、とかく主観的で、好き嫌いの範疇を超えないと理解していることが多い。その魅力という曖昧なものに尺度を生み出すのがバーバラ・ミントの複雑化という視点だ。根本的な考え方としては、比較するということに似ている。街作文をすることで、比較すること、比較するための情報量を集めるということの大切さにも気づくことができるのだ。学生の調べる力を伸ばすためにも、街作文は有効なカリキュラムと考える。

8.　まとめ

今回の考察の中で、前半では文章教育に必要なエッセンスをみつけるために小・中・高の文章教育についてアンケート調査をしてみた。すると、高校３年間で文章教育を受けていなということが分かった。国語の授業ではインプットする読解についての要素が強く、アウトプットする経験が足りていないことがうかがえた。まずは「書く習慣」を文章教育のなかで根付かせていくことが大切だといえる。そして、調べる力を伸ばす、文章を書く上での概念を明確にする指導が必要だと結論付けたい。後半部分では、カリキュラムを紹介した。書く習慣を身に着けることと、概念を明確にする「400字作文カリキュラム」。調べる力を伸ばす「街作文」だ。引き続き、効果的な文章教育カリキュラムを作り上げていきたい。

参考資料

「学生が文章教育に望むこと :「論述・作文」履修生の小論文に見る文章教育の課題」（山﨑哲永2001）
「キャリア教育としての『書く』力の育成-「国語」教育との連携を目指して-」（千古利恵子、中條敦仁 2007）
「キャリア教育における日本語表現科目の役割」（毛利美穂2010）
「高校生の勉強と生活に関する意識調査報告書～日本・米国・中国・韓国の比較～」（国立青少年教育振興機構　2017　http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/114/File/gaiyou.pdf）
「これからの研究を書くひとのためのガイドブック」（佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）
「ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方」（石井一成　2011）
「考える技術・書く技術―問題解決力を伸ばすピラミッド原則」（バーバラ・ミント　1999）

（2017.10.14 受理）